

大朝日岳山麓

ハチ蜜の森から

No.29



陰陽竜 / 金子富之

蜜ロウソクで照らす妖怪画展 (2006,7月)

ハチ蜜の森

採蜜ができるトチやキハダをはじめマンサク、コブシ、カエデ、ヤマザクラ、ドウタン、ウワミズザクラ、ミズキ、クリ、ハクウンボク、タラ、コシアブラ、センノキ、ヌルデ、クズ、イタドリ…と、数多くの蜜源樹や植物を抱える森のこと。ハチ蜜の森キャンドルは、その森の入り口にあります。

編集発行

ハチ蜜の森キャンドル

代表 安藤 竜二

☎990-1573 山形県朝日町立木 825-3

☎とファクシミリ 0237-67-3260

mitsurou@alto.ocn.ne.jp

www.mitsurou.com/

発行日 2007年1月20日

父のこと

「悪いけど、デボネア貸してくれないか？」

「あー。いくらでも使え」

可能な限りさりげなくお願いした私に、病床の父は、私の予想と裏腹に微かなとまどいすら見せずに優しくうなずいてくれた。

私にはどうしても解決しておきたかったことがあった。父が生きている間に。

昨年夏の夏のこと。

神戸市の「1.17 つどい（鎮魂式）」実行委員長の中島正義さんが、県内各地でロウソクの製作協力をしているボランティア団体を表敬訪問して下さることになった。一連のまとめ役をしていた私は、案内しながら同行させていただくことになった。

父から車を借りる絶好のチャンスだった。普段私が乗っているおんぼろな軽自動車では心もとないことを、うまく理由にすることができる。入院している父にお願いして、父の宝物の、そして私の大嫌いだった三菱の最上級自動車「デボネア」を貸してもらうことにした。

米沢市生まれの父は、若い頃朝日川のダム建設作業員として朝日町に滞在し、母と知り合った。石原裕次郎を気に入り、かっこつけるのが得意で、かなりな荒くれ者だったらしい。筋の通らないことは大嫌いだったから、そんなことが理由で喧嘩ばかりしていたという。子どもの頃、父を知る大人達に「お前の父ちゃんは恐い人だった」と、よく聞かされた。いつか息子の私たちもやつつけられてしまうのではと、本気で心配したこともあった。「男だったら筋通せ。弱いものいじめはするな。自分で判断しろ」が、父が息子三兄弟に教える生き方だった。反面、気風の良さも同じくらいの評価があり、困った時に助けてもらった話や、飲み屋でおごってもらった話などもよく聞かされた。

小学生の頃、父と二人で出かけた時に、欲し

かったスキーのゴーグルを内緒で買ってもらったことがあった。前に一度だけ懇願したことがあったが、家庭の財政事情を考えると、子どもながらに遠慮していたものだった。それは嬉しかった。隠しながら、大切に、大切に使った。

父は子ども三人が生まれてから、祖父が山仕事の一つとしてやっていた養蜂に目をつけ、生業にしようと苦労を重ねた。貯えもなくなり、よそ者の父に金銭的に支援して下さる人もなく、生活は大変だったらしい。足りない生活費は、養蜂の仕事が少ない冬場に出稼ぎへ行ったり、母はラジオ部品のハンダ付けの内職をしてまかっていた。

ハチミツで味付けした「焼肉のたれ」を売りに、冬場だけの焼き肉居酒屋「はちや」をやっていたことがあった。兄も私も、毎日学校帰りに焼き鳥刺しを手伝った。まだ小さかった弟は、両親のいない夜を我慢した。一年目。居酒屋には電話がなかったから、客にタクシーを呼ぶ事ができなかった。父は、私たちのトランシーバーを使って、自宅で留守番している私たちに指令を送って来た。

「タクシーを呼べ」

「了解！」

中学生の兄はその度に電話していた。

家は小さな借家。車は小さな軽自動車。どっぷり貧乏だったにちがいないが、私たち子どももそんな生活に参加型で楽しんでいたような気がする。悪い思い出はいっさいない。

やがて私も、下宿して通っていた山形市の高校を卒業すると、家に帰り養蜂を手伝うようになった。そして200群も飼育する大型養蜂に至ることができた。家も国道沿いの一等地に大きく新築した。小さな借家で片寄せあつて暮らしてきた私には、フローリングの床とベッドの大きな一人部屋は、夢のようだった。

だが、その頃から父と、少しずつ仕事や生活の考え方に違いを感じるようになっていた。私が、環境問題や世界の貧困問題に必要以上には

まっていたことも大きな要因だったかも知れない。少しでも贅沢な暮らしは許せなかった。それに、前の暮らしとの大きな違いに、なにか物足りなさも感じはじめていたのだと思う。

そしてついに、私と両親とのけんかが絶えない生活がはじまった。実は、私の結婚問題が直接的な原因だった。お互い後継ぎだったから困難を極めていたのだ。妻の母が一人暮らしになってしまうので、とりあえずそちらに住みたいと願ったものだから、「結婚は許すが養蜂は継がせられない」と父の答えが返ってきた。

私が抜けてしまえば、増やしたミツバチの世話や新築したローンの支払いが困難になることは分かっていたから、答えなんて出しようがなかった。私と両親は毎日のように口論ばかりしていた。

答えの出ない口論の末のものもんは、何かにぶつけないと納まらなかった。ハチミツ収穫の現場で一輪車をひっくり返して帰って来たり、ストーブを蹴り倒して壊したり、ひどい時には知り合いの飲食店で口論になり、生ビールのジョッキを床に叩き付けたこともあった。私は鬼のように、いろんなものにあたっていた。

そして、父がほんの少しグレードの高い車に買い替えたばかりのこと。こともあろうか、口論のはずみで、今度はその車のボンネットを蹴りつけて、少し凹ませてしまったのだ。振り返ると、その頃の私はなにかに取り憑かれたように自分らしさを失っていた。

それからまもなくのこと。父は、「あや」がついたからと、今度はなんと三菱の最上級自動車「デボネア」を購入した。この車には、当時はまだめずらしいカーナビや、エンジンを離れた場所からかける装置がついていた。ソファのような運転席に座れば、いすが自動的に好位置に移動し、ハンドルも下りてきた。高級塗装は燦然と輝いていた。ガレージには自動シャッターまで取り付けられた。

父がついに性格の悪い「成金」になったように思え軽蔑した。そして私は、「デボネア」を絶

対に運転しないことを大きく宣言した。

その後、結婚問題は偶然手がけ始めていた蜜ロウソクを製造しながら、養蜂にも手伝いに来ることでまとまった。誰も蜜ロウソクを生業にできるとは思っていなかったから、正確には私の気持ちだけに整理がついたと言ったほうがいだろう。

心に誓った。結婚生活がどんなに貧乏になっても絶対に父に頼らないことを。実際、父はことあるごとに働いた以上の金を渡そうとしてきたが、私はかたくなに断っていた。無理に結婚してしまった申し訳なさもあった。

おかげで両親のみではないが、貧乏の苦勞を少しだけ知ることができた。ロウソクを買っていただける喜びや、子どもに対する親心も知った。根っからの「ありがた志向」になった。私は、だんだん父が差し出すチップを、洪々だももらえるようになっていた。

いつだったか、父がデボネアを買うことになったエピソードを母に聞かされた。うちに来ていたセールスマンが癌でまもなく死ぬことを知り、彼の成績をいくらでも上げてやりたくて、思い切って買ったのだそうだ。なんとも父らしい。そういえば、普段は母の小さな車を乗り、「ここぞ」という時にしかデボネアは乗っていないなかった。

晩年、父は背広を着込んで、助手席に母を乗せ、よく旅行に出かけた。ふるさとの小野川温泉はもちろん、会津、金沢、京都…。父との思い出をいっぱい作ってくれたこの車は、母にとっても大切な宝物だから、未だにガレージに残されたままだ。



以前にラジオを聞いていたら、誰だったか小説家が出ていて、手作りの高級万年筆をついに手に入れた話をしていた。その万年筆は若い頃から憧れていたが、文才も財力も苦勞の数も、まだまだその万年筆とはつり合わないから買わなかったと。分不相応だと思っていた。と。

ふと、父のデボネアと重なった。きっとデボネアは、がんばった自分へのかっこいいご褒美であり印だったのだろう。そんなことに、私も少しだけ苦勞を知って気付くことができた。申し訳なく思っていた。でも、なかなかそんな思いは何年たっても伝えられない。あやふやな結末になってしまっていた。私は、デボネアを運轉することで、そんな思いを父に伝えたかったのだ。

車中、中島さんに、そんなことを話しながら、空港にお送りし、案内は無事終了した。別れ際に「宝物の車に乗せてくれてありがとう」と、優しく言って下さった。

まもなく、小春日和な秋の日。
最後の入院となる父を病院へ送り届けた。
帰り際、父はポケットから裸の一万円札を取り出して、下の方からさっと、かっこつけて手渡して来た。
「とっておけ」
「いいよ」
「いいから」
「サンキュ」
素直に受け取った。
かっこつけた父から受け取る最後のチップになった。



父光男は、C型肝炎をこじらせ今年の年明けに69歳で亡くなりました。50代後半とも思えた若づくりの父が、入院とともに60代、70代、80代の容貌に変わり、最後はミイラのようなものでした。腹部だけは、腹水で臨月の妊婦のようでした。苦しさから解放させるために、何度か水を抜きましたが、それは命のエキスだったのでつらいものがありました。生体肝移植をしようと健康体の弟が頑張りましたが、高齢と体力不足で叶いませんでした。母は三ヶ月間病院の簡易ベッドで泊まり込みました。

そして最後は、突然静脈瘤が破れ、血を吐き続けながら、家族の感謝の言葉も聞かずに亡くなりました。

C型肝炎ウイルスの感染は、非加熱血液製剤の使用や、かつて行われていた予防接種注射の回し打ちなどの医療行為を主に、全国に広まったものです。(唾液など体液での感染は極めて稀だそうです) 現在も200万人以上の感染者がいます。

父は後者のほうだったと思われます。予測できなかった事とはいえ、国が薦めた医療行為によって命を縮めたことにおそらく間違いはありません。父も家族も悔しさを残したままの最後となりました。

せめて、もう少しこの病気について知識を持っていたら無理をさせなかったのにと悔やまれます。肝臓は「沈黙の臓器」と言われ、ぎりぎりになるまで症状を表さず、表れる頃には、さうとう悪くなってしまっているのです。

国は、父のような感染者に対しても、最低限の配慮を施して欲しいものです。たとえば、家族に病気の知識を確実に伝えること、検診は定期的な通知を出すなどして強く促すこと、インターフェロンや末期治療など高額になる医療費をさらに軽減すること等を、前向きに取り組んでいただきたいです。感染者は保険にも入れないのです。

生前は、多くのみな様にお世話になりました。心から御礼申し上げます。養蜂の仕事は、これまでどおり継いでくれている弟をサポートしながら大切にしていこうと思っています。

NEWS

蜜ロウソクで照らす妖怪画展（表紙紹介）

夏。東北芸術工科大学博士課程の日本画家金子富之君の描いた妖怪画を、蜜ろうそくの灯りが照らしました。会場は、朝日町にある明治時代に作られたお城のような木造校舎「旧三分校」です。

ノートデッサンや、屏風やふすま絵を思わせる大きな作品まで、展示された彼の絵は細部まで繊細に描かれ、その技術力と表現力にはため息をついてしまうほどです。なにしろ怖い絵がいっぱいです。

見所はやはり夜でした。日が落ち、蜜ろうそくの光が絵を強く照らし始めると、恐い妖怪たちが陽気に優しく笑いはじめたのです。しかも絵から浮き立って見えました。画材に使われた金箔も昼とは全く違う深い輝きを放ちました。

明るいうちは、正直あまり居心地いいとは思えませんが、夜は恐さと同じ分だけ逆に居心地いい感じがしました。

電気照明のなかった時代、屏風絵やふすま絵、掛け軸などの絵は、きっと違った魅力を放っていたのかもしれない。

キャンドルライト咲きました！

春、チューリップの「キャンドルライト」が、工房前の小さな花壇で咲きました。大阪にお住まいの、出来享子さんから球根でいただいたものを一昨年秋に植えていたのです。先の方だけ白いふちどりのある赤い花びらは、私の好きな忘れな草の水色に映えてとてもきれいで、癒されました。

（←前写真）そして「なるほど」と納得しました。実は、以前上京の折りに、「キャンドルライト」という高級苺シャーベットをごちそうになったのですが、形はとても灯火には似つかわず、なぜこの名前がつけられたのか想像できなかったのです。まもなく、出来さんから同じ名前の球根が送られてきたので、もしかしたらと期待して植えていたのです。咲いたきれいな

花は、まさにあのシャーベットと同じ色形をしていました！

大朝日岳登山で日月

昨年秋、6年生になる娘ゆふみの親子行事は、この町の誇る朝日岳登山でした。若い頃何度か登ったことはありましたが、宿泊した鳥原小屋の夜明けに、これまで見た事のない素晴らしい景色を眺めることができました。

それは日と月です。生まれたての優しいご来光が山々をピンクに染めながら登る姿にうっとりしていると、石川トキエ校長が「安藤さん後ろ見て」と。振り返ると上空で満月がまだまだ堂々と静かに輝いているのです。太陽と月がどちらも同じ位の存在感、美しさを見せていました。違うのは、やはり動と静。校長先生は、子ども達に「これが陰陽だよ」と説明下さいました。私は、あまりにも神聖な風景に、何度も前を見たり、後ろを見たりを繰り返してしまいました。

かぼちゃランタンで小人の村づくり 11/4

昨年できなかったこともあり、東京や千葉からの方も含め 40 人以上の皆さんが参加して下さいました。

この小人の村づくりは、かぼちゃをくり抜いて、小人の家型ランタンを作り、紅葉した葉っぱの下に村のように配置して灯すものです。振り返ると 11 回目の開催になりました。

今年は 4 種類のかぼちゃを準備したこともあり、いろんな作風が楽しめました。真っ暗に日が落ちると、紅葉した葉っぱが高い所まで透かし出され、見事な小人の村が出現しました。この行事定番のホットドリンク「ハチミツかぼちゃミルク」も大好評でした。早くも、来年も参加したい声が聞こえてきました。

※朝日町高田にお住まいの岩崎久美子様より、たくさんのハロウィーンかぼちゃをご協賛いただきました。ありがとうございました。

灯台型燭台「ひとりじゃないよ」

東北芸術工科大学で陶芸を学ぶ4年生8人の作品展「二才四ヶ月展」へ、藤本えりかさんの作品を見に行ってきました。姫路市出身の藤本さんは、灯台型のキャンドルスタンドをたくさん作っています。蜜ロウソクを自分でこしらえ、灯台の光として灯して下さいました。かわいらしいそれぞれの灯台からは、優しい灯りがチラチラこぼれ、ずーっとそこに居たくなる空間になっていました。作品名を見て、なるほど。

「ひとりじゃないよ」でした。



トイレの屋根が直りました！

前号で、工房の屋根の雪が落ちて、別棟のトイレの屋根が壊れた報告をいたしました。お陰さまで無事に改修することができました。しかも工房と同じ半切妻屋根になり、雰囲気の良い姿になりました。ところで今年は、驚くほど雪が降らないです。ちょっと不安ですが、生活は楽です。

蜜ロウソクの音探し！？

ここ朝日町では、環境と住民の関わりをテーマに町全体を博物館ととらえ、朝日町らしさを探し表すエコミュージアムに取り組んでいます。

そのワークショップの一つとして、昨年の初夏、「音」を探し録音しながら町を巡るツアーを開催しました。(東北サンプラン助成事業、霊山こどもの村、石ノ森萬画館と共同開催) 幼稚園児から70代の方まで、定員の25人が参加下さいました。

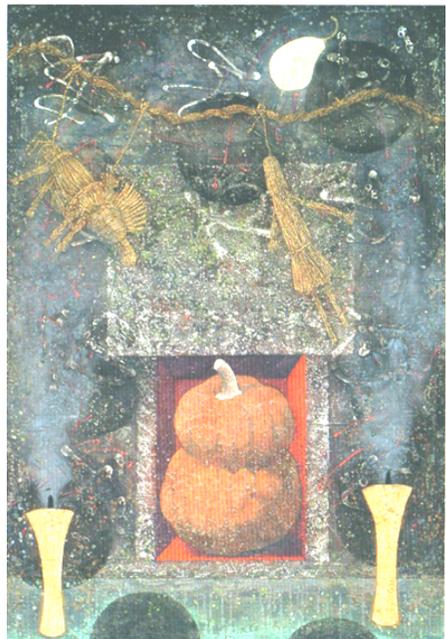
大沼の浮島や空気神社、最上川五百川峡谷などとともに、私のミツバチ観察会や蜜ロウソク作り体験もコースに含めました。さて、蜜ロウソクの音はどうなるかと少々心配しましたが、感動の声を収録できました。一気に電気照明を消すと「うわぁきれい」「みんなの誕生日みたいだね」との声。そして「ハッピーバースデー」の歌を合唱しました。みんなの作った灯火が優しく揺れていました。後日、仙台市の音楽家橋元成朋さんが音楽に組み込んですてきなCDが完成しました。

蜜ロウ利用術⑨

不思議な画材

米沢東高等学校で美術を教える吉田卓哉さんは、蜜ロウを使って抽象画を描かれます。

私は単純に油絵の具に蜜ロウを混ぜて塗るのだろうと思っていましたが、先日米沢市のギャラリー「パセオ」で開かれた個展に伺って驚きました。蜜ロウそのものを画材として使っていたのです。感動したのは、象徴的な存在の「かぼちゃ」や「祠」を描いた暗い背景に、無数の星のように、ぼたぼたとしずくを垂らした蜜ロウです。神聖な静の空間、あるいは時間、微塵な魂の浮遊、異次元の空気などを勝手に想像し見入ってしまいました。その蜜ロウは寒さで表面に「ろう粉」をつけ白くなっていましたが、「予想外でしたがそれがいいのです」とおっしゃられました。よく見ると、絵の中に大きく描かれたロウソクもまぎれもなく蜜ロウそのものでした。蜜ロウが絵の中で大切な役割を持って活躍している事に、誇らしく思い、満足して帰ってきました。



祠話

※No28号で紹介した「ロウ拭き」は、「ロウ曳き」の誤りでした。また、粉状ではなくペースト状のものを使っていたそうです。大変失礼しました。



キイロスズメバチ

20年以上養蜂の仕事を手伝ってきましたが、昨年は気持ち悪い事がありました。それは、キイロスズメバチがミツバチを襲いにこなかったことです。

私の担当する工房近くの白倉蜂場には、8月から10月にかけて、例年なら一日で100匹以上のキイロスズメバチがミツバチを捕らえにやってきます。

彼らは、巣箱の前でホバーリングしながら待ち構え、帰って来るミツバチを一匹捕らえると、すぐ近くの木や草の小枝にぶら下がり、牙を使って解体作業をはじめます。胸部の肉だけにして自分の巣に持ち帰り幼虫に食べさせるのです。

幼虫はひきかえに特別なアミノ酸のよだれを分泌します。成虫はそれを飲むと体の中でエネルギーが効率良く燃焼され、さらにパワーアップしてミツバチハントにやって来るしくみです。ちなみにその特別なアミノ酸を研究して開発されたのが、Qちゃんでおなじみの脂肪燃焼型スポーツドリンク「バーム」なのです。私も駆除してきた巣の幼虫を育てようと、刺身を与えたことがありますが、口元に餌があたると確かに透明な液体を吐き出していました。

話しは反れましたが、彼らはこの作業を一日で何度も繰り返すわけですから、被害もいつのまにか大きくなります。それに、巣の入り口で度々待ち構えられると、ミツバチ達は働きに行けず、越冬のための花粉やハチミツが集まらなくなります。すると女王蜂は、冬が近づいたと思ひ産卵数を減らしてしまうのです。群れの蜂数が減ると、冬を越させるのが困難になってしまいますから、養蜂家はぎりぎりまで産卵を続けさせる努力が必要なのです。

私たちは、捕虫網を使って一匹ずつ捕まえて足で踏みつぶすという原始的な作業を毎日繰り返しています。9月のピーク時には、午前100匹、午後100匹捕まえる日もざらにあり

ます。蜂場内をあっちに行ったりこっちに来たりと、けっこう体力を使う仕事です。一匹もいなくなるまで頑張りますが、翌朝には、また同じ数のキイロスズメバチが通ってきます。周辺の幾つもの巣から毎日それだけ生まれてくるということでしょう。さすがにうんざりしてしまいます。

しかし、私の動体視力も相当鍛えられるようです。高速飛行しているものを捕まえたり、背後から迫って来る羽音を聞いて瞬時に網を出して捕まえたり、自分でも惚れられするような技が出るのが何度もあります。残念なのは、誰も見てくれないことですが…(笑)

そんなスズメバチ退治を、昨年はほとんどしなくて良かったのです。一日で飛んで来るのはせいぜい2-3匹。近くに成長不良な群れが一つある程度なのでしょう。毎年依頼される住宅地のスズメバチ駆除も数えられる程しかありませんでした。こんなことははじめてです。

養蜂仲間が不気味なことを言っていました。「アブラゼミが鳴かなかった。空を埋め尽くす赤とんぼもわずか。イナゴは皆無。」確かにそうでした。他にも心当たりはあります。ハエ叩きした記憶がありませんし、雨の夜に道路に無数に現れる小さなカエルも。カエルのうるさい鳴き声も、秋の虫のうるさい鳴き声も記憶にありません。街灯に飛んで来るカブトムシも、秋にやってくるカメムシもとても少ない年でした。なによりミツバチ達が原因不明の減り方をした年でした。それが原因で蜂がとりかえしのつかない病気にかかってしまった養蜂家もいました。

昨年の大雪の影響なら良いのですが、近頃、農家の高齢化に伴い、残留性の高い農薬が使われはじめたことも事実なようです。岩手県の養蜂協会では農薬被害が如実に現れたとして2年続けて損害賠償を請求し認められました。推測で言うてしまうのは、罪なことになりそうですが、レイチェルカーソンの『沈黙の春』を思い出し、ぞっとしてしまいました。

ハチ蜜の森料理店®

たまご焼き



兄も私も小学生の頃。

弟も小さかったので、

両親が朝早いハチミツ収穫に出かける日は、祖母が前日から泊まり込み、朝ご飯を準備して学校へ送り出してくれました。

祖母の作る卵焼きの形には特徴がありました。フライパン一面に丸く広げて焼き、固まりかけたところを半分にたたみ、さらに半分にたたんだ扇形をしていました。祖母はハチミツ屋にも関わらず、そこに砂糖をかけて醤油をかけて出してくれました。案外、祖母も私たち子どももハチミツは飽きて砂糖のほうが美味しく感じたのかもしれない(笑)。母が作ると、さすがにハチミツに醤油でした。卵と一緒に溶いてから焼いてくれることもありました。甘い焦げ目がおいしいのです。どれも大好きな卵焼きでした。

クリスマス前の深夜の残業から帰って、思い出して作ってみました。熱々の焼きたてにハチミツをほんの少し、たらーっとかけて、すかさず醤油をじゅーっと。

おかげで、いつもより吞んでしまいました。

掲載誌紹介 ご紹介いただきました！

- ・ SPUL 11月号 集英社 (蜜ロウソク紹介記事)
- ・ PS 12月号 小学館 (蜜ロウソク紹介記事)
- ・ ESSE 10月号 扶桑社発行 (情報)
- ・ うかたま vol.5 農山漁村文化協会 (情報)
- ・ Latta 8月号 小学館 (情報)
- ・ あんふあん 仙台リビング新聞社 (情報)
- ・ マーメイド (蜜ロウソクづくり体験レポート)

ありがとうございました。

通信購読について

- ・ 定期購読を希望される方は、1000円(およそ3年分、80・50円切手可)をお送り下さい。
- ・ 購読期限は、お送りした時の封筒の住所下に、たとえば12-32と号数を明記しています。
- ・ 購読費が切れた時は、こちらから振り込み用紙を同封させていただきます。

エコミュージアムイベントのお知らせ

栃の花咲くハチ蜜の森を訪ねる

ハチ蜜の森キャンドルは、朝日町エコミュージアムの見学・体験施設として協力しております。今年は、ハチ蜜の森を訪ねる企画を、この所ごぶさたしておりましたので開催いたします。原生の森をゆっくり訪ねてみませんか。

日時 19年6月3日(日) 午前11時～

※ただ今企画中ですので、詳細は近くなりましたらホームページ <http://www.mitsurou.com/> をご覧下さい。

編集後記-----

昨年夏休みに子ども達の社会見学を兼ねて、久しぶりに東京へ遊びに行ってきました。

2度目の東京ディズニーランドは、やっぱり華やかでした。なぜか10円や20円で遊べるレトロな手動ゲームに楽しくはまっていました。

前日に宿泊予約した九段会館は、石造りの古い立派な建物でした。武道館もそばに見えました。芸能人と会えるかもと胸をときめかせました。

夜の大衆居酒屋に付き合わせたら、私のビールジョッキにレモンの種が沈んでいて、それまで食べていたものが幾つも‘ただ’になり喜びました。帰り道、明るい夜の街路樹でセミがうるさく鳴いていて驚きました。

電車はだまって乗っていました。外国語を話す人が、どこにでもいて驚きました。

東急ハンズは、工作好きなのでたまらない場所でした。しばらく釘付けになりましたが、結局買ったのは室内用RC飛行機でした。

紀伊国屋書店では、圧倒的なアニメコミックの多さに感激し、本だけで何階もあることに驚きました。歩き疲れた娘が通行人のファッションチェックを楽しんでいました。

東京タワーでは、下が見える透明ガラスの床に誰も乗れませんでした。真下から見上げてみても迫りがありました。

販売する燭台仕入れも兼ねて行った TOC 東京卸売センターでは、すべてが半額なことに驚きました。

楽しい三日間でした。結論は、「お父さんばっかり、講座の仕事で何度も東京に行ってずるい」でした。都会には都会の良さがあることがばれてしまいました。

Ps. 申し訳ありません。発行が遅れて春夏秋の報告になってしまいました。次はいよいよ30号です。書き始めていつのまにか15年。記念の号にしようと思っています。どうぞお楽しみに。